

皮心伝心

琳派に想う

「りんぱ」といってもリンパ球やリンパ節の淋巴ではなく、本阿弥光悦と俵屋宗達を創始者とし、尾形光琳に受け継がれ、酒井抱一が江戸に広めた日本芸術の流派である。2015年はこの琳派が誕生して400年にあたる年として、宗達、光琳、抱一が描いた風神雷神図屏風を一堂に会した特別展が催された。

二人の息子に風太、雷太の名を与えた自分としては、この機会に本物を拝ませたいと思い美術館へと連れ立って出かけた訳だが、肝心の屏風の前に辿り着いたときには子供達と見事に逸れてしまっていた。帰り道、一緒に鑑賞できなかったことを嘆くと、妻には「京都から越す直前に建仁寺へと出かけ、屏風の前でまだ小さかった子供達を並べて写真を撮ったのだから良いじゃないの」といわれた。あれは精巧な模写であり、決して本物ではなかったのだが、もっとも、留学中に異国の地で新しい命を授かったとき、今のご時世には相応しくないかなと自省しながらも、良心に恥じない道を歩んで欲しいという願いを込めて、彼らの名前は自分が生まれ育った群馬で親しまれているカルタの読み札からいただいた。「雷(らい)と空っ風、義理人情」というのが、それ。

琳派であるが、狩野派などの流派が直接師から画技を学ぶことで伝承されたのに対し、時間や場所、身分が遠く離れた人々によって受け継がれたという点で他に類を見ない。生没年不詳な宗達との共作がある光悦(1558～1637年)が活躍したのは江戸の初期、光琳(1658～1716年)が活躍する時代とは百年ほどの開きがあり、抱一(1761～1828年)が登場するのも同じだけの月日を待たなければならない。

風神雷神図屏風をお目当てに出かけた展覧会であった訳だが、しかし最も心に残ったのは、抱一が描いた夏草図屏風であった。この二曲一双の屏風を目にするまで、恥ずかしながら自分は、酒井抱一なる絵師の存在を知らなかった。しかも驚くべきことに、銀地の上に描かれた抱一の最高傑作とされるこれら草花は、あろうことか彼が憧れた光琳の風神雷神図屏風の裏に描かれていたものだという(現在は画面の損傷を防ぐために風神雷神図屏風から剥がされ、東京国立博物館に所蔵されている)。抱一は、向かって右側の屏風(右隻)には葉先や花卉を真下に垂らす昼顔やユリを描き、左隻には宙に舞う鶯の葉や葉先を横になびかせるススキや葛、フジバカマを配置しているのだが、実は雷神の裏に夏草を、風神の裏に風に吹かれる秋草を描いているのである。しかも、雷神の裏には雨粒を一滴も描かず、右上に水の流れを描くことで雨が激しく落ちてきたことを見る者に連想させる。なんという心意気だろうか。

光琳の風神雷神図屏風は宗達のその模写であり、抱一の風神雷神図屏風は光琳のその模写である。今では想像もできないことだが、国宝となった絵の上に直接写し紙を置いて、光琳は宗達の、そして抱一は光琳の絵を写しとったといわれている。

指導医不足が叫ばれて久しい。直接、手ほどきを受ける、あるいは授ける機会がないとしても、本誌に込められてきた珠玉のメッセージに触れるなかで、皮膚科医として憧れを覚える先達の技や心意気を感じ、それを伝えることができればと願っている。

神戸 直智

(関西医科大学皮膚科学講座 准教授)